

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「準動詞に関する通言語学的研究」（2013年度第2回研究会）

Title: Cross-linguistic Research on “Verbals” (The 2nd meeting)

日時：2013年10月19日（土曜日）10:30-17:30

Date/Time: 19 Oct 2013 (Sat.) 10:30-17:30

場所：AA 研マルチメディア会議室 (304)

Venue: Room 304 (Multimedia Conference Room), ILCAA

Language: Japanese

1. 李林静 (AA 研共同研究員 / 成蹊大学)

「ホジェン語の動詞屈折形式とその統語機能」

ホジェン語の屈折形式も、他のツングース諸語のように定動詞、形動詞（分詞）、副動詞と3種に分類することができる。

定動詞直説法はもっぱら主節述語として機能し、3人称非過去の形式しか持っておらず、それ以外の人称・数及び時制の標示はもっぱら分詞の述語機能に頼る。

分詞は主節述語、連体節述語、名詞節述語の3つの機能を持っている。このうち、テキストでもっとも多く用いられているのは主節述語としての機能である。したがって、分詞は動詞性がより強い形式といえる。

副動詞は副詞節の述語として機能し、基本的に文末に立つことができず、主節なしで文を形成することもできない。しかし、人称を伴う条件副動詞-ki に2人称単数人称接尾辞が後続した時のみ、文末に立つことができ、文を言い切ることができる。この形式は2人称単数への命令を表し、強いモーダルな意味を表す。このような条件副動詞-kiの機能は定動詞に似た部分もあるといえる。

2. 吉村大樹 (AA 研共同研究員 / 龍谷大学他)

「トルコ語の準動詞の形態・統語的ふるまいについて」

本発表ではトルコ語においても定形・非定形の厳密な区別が難しい場合があることをいくつかの例を挙げて提示するとともに、以下のことを主張した。まず、動詞の屈折はある語彙項目とその最終的な具現形との関係であると定義することで記述することが可能である。次に、派生と屈折は厳密な区別が困難であるが、いずれも定義の問題であり、派生・屈折・接語化という形態論的な膠着のプロセスを説明することが理論的・記述的な目標となる。さらに、準動詞・動詞からの派生語いずれも、動詞らしさを残している点は共通しているが、前者は「ある語彙 X の具現化された形」、後者は「ある語彙と何らかの関係をもつ別の語彙 Y の具現化された形式」ということができる。

この共通点・相違点は、概念的に語彙と語形を明確に区別することで記述・説明が可能である。最後に、言語の記述者がどのようなカテゴリー観に基づいて当該言語を記述するかという問題を提起した。

3. 小野智香子 (AA 研共同研究員 / 千葉大学)

「イテリメン語の準動詞について：不定詞の分類」

イテリメン語（チュクチ・カムチャツカ諸語）において不定詞として扱われている形式として、KES 形, S 形, KI 形, L 形の4つがある。これらは *uzu/ənzu* 「～し始める」, *iti* 「～するよう命じる」, *utu* 「～できない」, *c'eʔ* 「一緒に～する」などの動詞と共に使用されることが多く、KES 形と KI 形, S 形と L 形をそれぞれ置き換えても意味・機能に違いは見られない。しかし KI 形・L 形は副動詞的な用法、KES 形・S 形は「～するために」という目的を表す場合や名詞句として機能する場合があり、両者は本来別の機能を有していると考えられる。仮に KI 形・L 形は主動詞の前の動作・状態を表し、KES 形・S 形が主動詞の後の動作・状態を表すとすると、*uzu/ənzu*, *iti*, *utu*, *c'eʔ* などの主動詞(述語動詞)はその時間軸上の前後関係の両方を内包するのではないかと考えられる。